様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３１０

研究課題名（和文）フィクション作家としてのHarriet Martineauと19世紀の心理学

研究課題名（英文）Harriet Martineau as a Fiction Writer and Nineteenth-Century Psychology

研究代表者
大竹　麻衣子（Ohtake, Maiko）

桜美林大学・人文学系・准教授

研究者番号：６０３５２７０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：ヴィクトリア朝の論客として知られるHarriet Martineau（１８０２－１８７６）による１８２０年代から３０年代初めの修作に青少年向けの教訓物語群がある。本研究はこれらの作品に当時マーティノウが傾倒していた18世紀の道徳哲学者David Hartleyによる心の仕組みに関する理論、観念連合説の影響が見られることを明らかにした。マーティノウの心に対する見方や心理の描き方はユニテリアン派の知的伝統とも結びついており、一世代前に同じくハートリーの思想の影響をうけたAnna Barbauldの作品に見られる合理的思考や感覚と結びついた道徳的感情を重視する姿勢を受け継いでいることも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Harriet Martineau (1802-1876), who is known as a Victorian writer and social reformer, wrote several didactic tales for the youth between the 1820s and the early 1830s as a novice writer. This study shows how these stories reflect the associationist idea of the mind by David Hartley, an eighteenth-century moral philosopher, whom Martineau admired in her youth. It also locates Martineau's idea of the mind and her representation of one's inner life in the Unitarian intellectual tradition, where Anna Barbauld, who was also influenced by Hartley's theory a generation earlier, wrote poems and children's stories. It is revealed that Martineau inherited Barbauld's attitude which emphasized the importance of rational thinking and moral feelings connected to various physical sensations.

研究分野：人文学

キーワード：Harriet Martineau　David Hartley　Unitarianism　Associationism　Anna Barbauld　psychology　Monthly Repository　religious tract

１．研究開始当初の背景

(1) Harriet Martineau（１８０２－１８７６）は、ヴィクトリア朝の文筆家、社会改良家として著名であるが、その文学的功績は長く顧みられなかった。１９７０-８０年代の初期の研究は、彼女の小説 *Deerbrook*（１８３９）やフィクション形式の社会啓蒙書 *Illustrations of Political Economy*（１８３２-３４)などを対象にその成果と限界を明らかにした。

(2) 小説における心の表象と１９世紀の心理学の関係は、２０００年代以降、１９世紀小説研究の最も重要な領域のひとつであるが、主要な研究は、１９世紀半ば以降の小説と理論に集中している。主に１９世紀前半に影響力をもった David Hartley らによる観念連合説を青年期のマーティノウが信奉したことは知られているが、その影響の研究はほぼ皆無である。

(3) マーティノウのフィクション作品は、ロマン主義時代からヴィクトリア朝への過渡期に書かれ、時代とジャンルの両面ではざまに位置し、従来見過ごされてきた領域である。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、ヴィクトリア朝の論客として著名なハリエット・マーティノウのフィクション作品を再評価することで、１９世紀イギリス小説の発達過程の一側面を明らかにすることである。

(2) 具体的には、これまでほとんど注目されていないマーティノウの１８２０年代から４０年代のフィクション作品に、１９世紀において影響力のあった主要な心理学理論の一つである観念連合説にもとづく心に対する見方や心理の描きかたがみられることを示し、それらが１９世紀半ば以降に隆盛するヴィクトリア朝小説における心理表象の特質の形成につながっていることを明らかにすることである。

３．研究の方法

(1) マーティノウが１８２０年代末から３０年代の初めにかけてユニテリアン派の機関紙 *Monthly Repository* に寄稿した心のメカニズムをテーマとする一連の論説を、ハートリーの *Observations on Man*（１７４９）と比較・検証することで、マーティノウのハートリー理論の解釈の特徴を明らかかする。

(2) マーティノウの心に対する見方が作品中にどのように表れているかを明らかにするために、１８２０年代から３０年代の初めに彼女によって書かれた宗教指南書や青少年向けの宗教的教訓物語を分析対象として取り上げる。具体的には *Devotional Exercises*（１８２３）、*Christmas-Day: or the Friends: a Tale*（１８２５)、*Principle and Practice*（１８２７)、*Five Years of Youth; or Sense and Sentiment*（１８３１）である。

(3) 作家としての形成期にあったこの時期のマーティノウの個人的な信条や精神生活、執筆活動上の指針の手がかりとして、この時期の書簡を検証する。

４．研究成果

(1) マーティノウの心理表象の特色を、執筆年代に沿って作品を分析することで検証した。まず、最初の著作である宗教指南書 *Devotional Exercises* の分析を行った。本書はフィクションとは異なるジャンルに属するものの、具体的な状況設定や個性を備えた架空の語り手による内省など、フィクション的な要素を多分に含んでいる。このような要素は、同書を同時代の数多くの宗教指南書の中で特色のあるものにしただけでなく、マーティノウが後年（1830 年代末）の自身の小説 *Deerbrook* で示したいくつかの特色の萌芽を含んでいたことを明らかにした。すなわち、中産階級の家庭生活を舞台とし、そこでの人間関係を軸に人物の内的な葛藤や成長を描くことで道徳的な主題を提示する、という特質である。この特質は、19C 半ば以降のヴィクトリア朝小説の主流ともいえ、そのような特質を備えた小説 *Deerbrook* を 10 年近く時代に先駆けて書いたマーティノウがどこにその文学的源泉を見出したのかを考える上で重要な成果となった。

(2) マーティノウの最初のフィクション作品 *Christmas Day* の分析においても有意義な成果が得られた。同作品は、18C 末から 19C にかけて数多く流通した宗教的な教えを広めるための小冊子（tract）のひとつとして書かれた教訓的物語であるが、執筆当時、非国教徒のユニテリアン派の信仰を持っていたマーティノウの宗教的見解に加え、心の問題への強い関心のために、この物語が当時の一般的な宗教的訓話とは明らかに異なる特徴を示していたことを明らかにした。

当時の宗教小冊子は主に福音主義派の信仰を広めるためのものであった。マーティノウの宗教的見解や「心」に対する特別な関心が *Christmas-Day* にどのような特色をもたせたかを検証するため、同作品を福音派の宗教冊子や子供向けの物語の代表的作家であった Mrs. Sherwood の作品と比較した。その結果、両者では「罪」の概念や「死」の場面の意義付けが大きく異なることが分かった。シャーウッドの作品が、これらふたつの概念を軸として、各々の登場人物に相応の因果応報がもたらされるプロットで構成されている

のに対し、本作品では「罪」という概念が明示的に示されることはほとんどなく、「死」の場面が描かれつつも、福音主義に特徴的な意義付けはなされない。すなわち、信仰深い人物にとっての死後の栄光への入り口として描かれることも、悔い改めない罪人が永遠の罰に直面する瞬間として描かれることもない。マーティノウが強調するのは、死を迎える本人の行方ではなく、むしろ死を看取る側にいるヒロインの精神的な葛藤とその乗り越えのプロセスである。神の存在は、その精神的なプロセスにおける導き手として言及されるため、宗教的教訓物語の枠組みは保持されているが、作品の宗教的スタンスや創作上の意図は、シャーウッド作品に代表される物語群とは大きく隔たっている。マーティノウが既存のジャンルの形式を利用しつつ、自らの目的に沿った内容、すなわち人物の内面生活の重要性について語るため、巧みにその枠組みを変容させていることを示した。

(3) *Christmas Day* には、マーティノウと同じユニテリアン派で、一世代前の詩人・子供向けの物語作家である Anna Barbauld の影響も見られることを明らかにした。マーティノウは、1820 年代初めにユニテリアン派の機関紙『マンスリー・レポジトリ』への投稿で、バーボールドによる数編の詩とエッセイを賞賛している。*Christmas-Day* における五感と結びついた自然描写を、バーボールドの詩と比較したところ、両者には強い親和性があることが明らかになった。

(4) バーボールドの詩的イメージの源泉が、マーティノウと同じ D. ハートリーの道徳哲学の影響を受けたものであることも明らかになった。両者が属するユニテリアン派の信仰は理性を重視し、罪の意識や罰に対する恐怖ではなく神の慈愛を強調するものだが、その根本原理を支えているのが、観念連合説を含むハートリーの道徳哲学である。それは Joseph Priestley などのユニテリアン派の指導者や教育機関を通じてこの宗派の知識人の間に広く行き渡っていた。

バーボールドの詩は、五感を通じた知覚とそこから喚起される感情の表現に特色がある。マーティノウの *Christmas-Day* における自然描写には、バーボールドの詩と共通のイメージや感覚への言及が見られる。両者に共通する感覚と感情の関係についての見方を浮き彫りにすることができた。

(5) *Principle and Practice*(1827)の分析では、ユニテリアン派における知的な伝統の影響を浮かび上がらせた。ユニテリアン派の理性重視の傾向は、18 世紀後半の子供向けの作品にもみられ、本作品はこの伝統に基づいていることを、ユニテリアン派の作家/教育家の John Aikin ・Anna Barbauld 兄妹による子供向けの物語集、*Evenings at Home* との比較を通じて検証した。

マーティノウは、18 世紀以来の子供向けの物語の伝統を受け継いだ人格形成という観点から心を描きつつ、19 世紀初頭の福音主義の高まりやハートリーの道徳哲学の影響を受け、新たな強調点を加えたメッセージを発信していることを明らかにした。

バーボールドとエイキンによる *Evenings at Home* は、相互に緩やかに設定を共有する家庭生活を舞台とする道徳的訓話のコレクションであるが、それぞれのエピソードのテーマから、１８世紀以来の理性重視の伝統が理想とする人物像が浮かび上がる。客観的な事実にもとづく合理的な判断力や冷静な行動力、忍耐力などを人格形成上の重要な項目としていることがわかる。*Principle and Practice* は、同じく家庭生活を舞台とした宗教的、道徳的訓話の性質を帯びた物語である。マーティノウが描き出す理想の人物像は、バーボルドらと同じく判断力や行動力、忍耐を備えた人格として描かれるが、１９世紀初期のイギリス社会を席巻した福音主義的傾向の影響下で、苦しみに耐えること自体がその人物の宗教的な徳を増すという見方が追加されていることがわかる。

(6)*Principle and Practice* には、ハートリーの理論を検証する際にしばしば見過ごされる、『人間論』の第２部における神の意思と人類の発達段階についての議論の影響もみられる。１８２０年代のマーティノウの書簡によると、マーティノウはこの第２部のキリスト教的世界観に感銘を受けている。人類の最高度の発達段階を自己滅却と利他主義の実現としているこの理論の影響として、利他主義に結びつかない自己実現を追求する人物に対する語り手の厳しい姿勢がみられる。

(7) *Five Years of Youth*(1831)の分析では、同作品とほぼ同時期にマーティノウがユニテリアン派の機関紙 *Monthly Repository* に発表したハートリーの観念連合説にもとづく心のメカニズムに関するエッセイとの比較を通じて、本作品の心の描き方の特質を明らかにした。同作品は若い時期に感情や想像力を正しく制御することの重要性を説いているが、この教訓は物語そのものだけでは理解しがたい。教訓の背後にある心のメカニズムについての考え方が十分に可視化されていないためである。*Monthly Repository* のエッセイはこれを補い、マーティノウの意図を明確化することに役立つことを明らかにした。一方、オースティンの *Sense and Sensibility*(1811)との類似性も指摘される本作品は、前者と異なり、具体的・現実的な核を持たない心の不安や闇を描いている点において、心の問題の新たな側面を描いていることも明らかにした。

＜引用文献＞
① Martineau, Harriet. *Deerbrook*. 1838; London: Penguine, 2004.

② Martineau, Harriet. *Illustrations of Political Economy*. 1832-34;

③ A Lady [Harriet Martineau]. *Devotional Exercises Consisting of Reflections and Prayers, for the Use of Young Persons; to Which is Added a Treatise on the Lord's Supper.* London: Rowland Hunter, 1823.

④ Hartley, David. Intro. Theodore L. Huguelet. *Observations on Man, His Frame, His Duty, and His Expectations*. 1749; Delmar, New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1976.

⑤ Anonymous [Harriet Martineau]. *Christmas-Day; or The Friends*. Wellington, Salop: F. Houlston and Son, 1825.

⑥ Anonymous [Harriet Martineau], *Principle and Practice; or The Orphan Family. A Tale.* Wellington, Salop: Houlston and Son, 1827.

⑦ Dr Aikin and Mrs. Barbauld. *Evenings at Home; or the Juvenile Budget Opened*, rept. from 15th London edn. New York: Harper & Brothers, n. d. Google Books Online.

⑧ Martineau, Harriet. *Five Years of Youth, or, Sense and Sentiment*. 1831; London: Darton & Harvey, c.a.1846.

⑨ Martineau, Harriet. Ed. Deborah Anna Logan. *The Collected Letters of Harriet Martineau*. Vol.1. Letters 1819-1837. London: Pickering & Chatto, 2007.

⑩ Martineau, Harriet. Ed. Deborah A. Logan. *Further Letters*. Bethlehem: Lehigh UP, 2012.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）
① 大竹麻衣子、「Charlotte Bronte と Harriet Martineau: 心の表象をめぐって」、『桜美林論考：人文研究』第８号、査読有、pp.３１-３９、２０１７年

〔学会発表〕（計　２　件）
① 「Charlotte Bronte と Harriet Martineau: 心の表象をめぐって」、大竹麻衣子、欧米言語文化学会　第８回年次大会　シャーロット・ブロンテ生誕２００周年記念シンポジウム、２０１６年 9 月（招待講演）

② ‘Reconsidering Practical Divinity: Harriet Martineau's Apprenticeship with Hannah More in the Early 1820s,’ Maiko Ohtake Yamamoto, The Martineau Society Annual Conference, 23-26 July, 2015（研究発表）

〔図書〕（計　１　件）
① 大竹麻衣子他、藤田繁、清水伊津代編、大阪教育図書、『文藝禮讃』、本人担当章「ハリエット・マーティノウの『ディアブルック』における心理描写と観念連合説」、pp. 109-120、２０１６年

６．研究組織
(1)研究代表者
大竹　麻衣子（OHTAKE, Maiko）
桜美林大学・人文学系・准教授
研究者番号：６０３５２７０４